

黒田如水奉納の夢想の連歌

豊臣秀吉の側近として活躍した黒田如水は、実名を孝高たかたかといい、初代福岡藩主黒田長政の父にあたる人物です。この如水が、晩年の一時期、太宰府天満宮の側で隠棲生活を送って和歌・連歌に明け暮れたことについては、以前この欄で紹介しました(のち『太宰府人物志』に収録)。

松むめや末ながかれとみどり
たつ 山よりつづくさ
とはふく岡

(松や梅の緑がいつまでも続きますように、
新芽がのびる山から続くこの福岡の地も黒田家の治世がいつまでも続きますように)

如水がある日眠っている
と、天神の示現により、この和歌を夢に見ました。慶長7(1602)年正月16日、黒田家の繁栄を願うこの和歌を起句として、如水らは太宰府天満宮で連歌会を興行します。「夢想之連歌」(夢で得た句を起句として詠む連歌)と記される金銀泥下絵の壮麗な連歌懐紙が、今も太宰府天満宮に遺されています。

ちなみに、この連歌懐紙は「福岡」の地名の初見資料とされます。黒田家は関ヶ原の戦いの後、豊前中津を経て筑前に入国し、慶長6年に福岡城の築城を開始しますが、



黒田家の関わりが深かった備前の福岡にちなんで、もとは「福岡」と呼ばれていたこの地を「福岡」と呼ぶようになったと言われています。

連衆(連歌会席に一座する作者達)は、如水・長政親子やその妻たちなど黒田家の人物、母里古庵・井手真斎など黒田藩士、大鳥居信岩・上座坊実右・華台坊良乗など天満宮社家他で構成されています。如水側近の連歌好士の一端を窺うことができるでしょう。

連衆の中に連歌師の木山紹印しやういんもいます。木山家は代々阿蘇大宮司家に仕えた家主でした。紹印の父紹宅も和歌・連歌をよくし、如水が中津に居た頃には、客分としてここに身を寄せ、如水が開く連歌会に参加していたことがあります。のちに、如水は戦乱で荒れた大宰府に入り復興に着手しますが、その時、連歌屋(下の会所ともいう)も太宰府天満宮の側に新たに建て、紹印を招聘しその初代にすえました。

黒田如水は知謀・知略にたけた参謀としてよく知られますが、ここ大宰府ではその文化人としての側面をより明確に知ることができます。